

俳句

ちかきけいのすけ

近木圭之介

下関市
(1912～2009)



【著作】

詩集『近木圭之介詩抄』（昭和60年）
句集『ケイスケ句抄』（昭和61年・層雲社）
詩画集『近木圭之介詩画集』（平成17年・第一出版）
ほか

明治四十五年（一九一二）一月、福井県で森富織大の三男末子として生まれる。本名正（まさし）。生後三か月、父親の勤めの関係で金沢市に移って七歳までこの地で過ごす。この地での生活については、自ら「北陸の風土は幼い私に色々な影響を与えてくれたようで、金沢は私の心のふるさとです。」と語っている。

そして七歳のとき、父の老家（兄）近木家の養子に求められて山口県の長府（現・下関市長府中土居本町）に移り、養父母との生活が始まった。成長後、小野田市（現・山陽小野田市）の旧制興風中学校（現・県立小野田高校）に進むが、卒業後の四年間は日本画を学び、また堀口大学や萩原朔太郎、フランスのジャン・コクトウ等の近代詩人の作品に親しみ、祇堂丸の俳号で新聞の俳句欄への投稿を始めた。

その後二十歳の秋、自由律俳句を提唱する萩原井泉水主宰の俳誌『層雲』に入会。このとき俳号も黎々火と改めた。

当時、『層雲』同人の中で、防府の種田山頭火、周南の久保白船、田布施の江良碧松をもつて周防の三羽ガラスと称されていたが、昭和八年（一九三三）三月、大山澄太に誘われて小郡の其中庵に山頭火を訪ねたことから、以後約八年間、三十歳の年令差を越えての親交が続き、山頭火は九州方面への旅の途中には必ず近木邸に立ち寄り、黎々火も門司鉄道局に勤める中で、しばしば其中庵を訪れた。

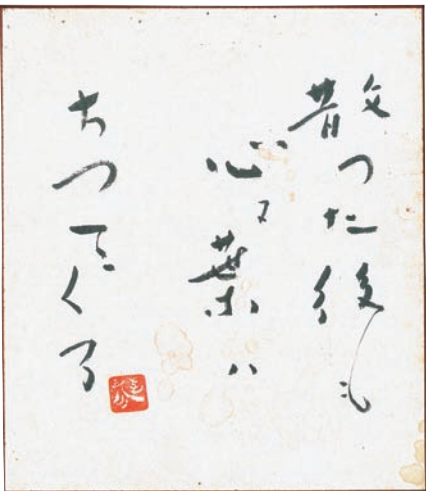
生活面では逸脱した軌跡をたどった山頭火ではあったが、性格は几帳面で、世話になった後の礼状や訪問予定の変更等については必ず連絡の葉書を出すなど、山頭火から黎々火への便りは実に百五十六通（内二通は封筒）に及び、その親交の程が伺われる。

ところで昭和八年（一九三三）六月五日、長府の地で古蹟散策中に黎々火が撮影した山頭火の後ろ姿の写真が、後年、雑誌『太陽』に大きく掲載され、その写真に「うしろ姿のしぐれていくか」の句が添えられたことで、まさに放浪の山頭火のシンボルのイメージとなり、師の井泉水も高く評価し、「層雲賞」も受賞したその俳人としての業績よりも、「山頭火の後ろ姿を写した人」という点で話題となる傾向がみられた。

ともあれ、昭和二十二年（一九四七）三十五歳のとき再び俳号を圭之介と改め、九十七歳までの人生を全うさ

れたその業績は、俳人であると同時に『層雲』の表紙を飾るなどイラストや挿絵等にも多くの作品を残し、自らを河童に擬して味わいある河童図も描いた。その七千句に及ぶ俳句作品は極めて知的な深い味わいを持っており、今後、『層雲』を代表する俳人の一人として評価は高まって行くであろう。

（文・清水唯夫）



直筆の色紙



近木邸の庭に設置された山頭火句碑（丸石）と圭之介句碑（長石）
二つの句碑をステンレス製鎖でつなぎ、鎖を動かすことで造型の変化が楽しめる。

近木圭之介

年譜

（提供・清水唯夫）

明治45（一九一二）年

大正8（一九一九）年

七歳

昭和5（一九三〇）年

一八歳

昭和7（一九三二年）
昭和8（一九三三年）

二〇歳
二二歳

昭和15（一九四〇）年

二八歳

昭和16（一九四二年）
昭和21（一九四六年）

二九歳
三四歳

昭和22（一九四七年）

三五歳

昭和44（一九六九年）
昭和51（一九七六年）

五七歳
六四歳

昭和53（一九七八）年

六六歳

昭和60（一九八五年）
昭和61（一九八六年）
平成6（一九九四年）

七三歳
七四歳
八二歳

平成17（二〇〇五年）
平成21（二〇〇九年）
（没後）
平成22（二〇一〇）年

九三歳
九七歳

1月22日、福井県で森富織大・ウラの間に三人兄弟の末子として生まれる。本名正（まさし）。父の転勤で生後三か月目に石川県金沢市に移り、小学校一年生終了までの七年間、金沢の地で過ごす。
山口県豊浦郡長府中土居（現・下関市長府中土居本町）の老家（父親の兄）近木満平・ツネの養子に求められて長府に来、養父母、祖父母と五人での生活を始める。
3月、山口県小野田市（現・山陽小野田市）の旧制興風中学校（現・山口県立小野田高等学校）を卒業。以後4年間、森富祇堂丸（きとうまる）の俳号で定型俳句作品を新聞に投稿するなどして過ごす。
秋、萩原井泉水主宰の自由律俳句誌『層雲』に入会する。
1月、俳号を「祇堂丸」から「黎々火」と改める。3月9日、大山澄太のさそいで山口県小郡町の、其中庵に種田山頭火を訪れる。このとき山頭火五十一歳であったが、以後、三十歳の年令差を越えて親しい交流が続く。6月5日、山頭火が来訪し、長府町の神社仏閣など古蹟を散策中、三島町の道路上において山頭火の後姿を撮影（露出60分の1）。
門司鉄道局本局（経理部）に入社。三十二年間勤続する。
9月、東京在住の親戚の女性吉田初子と結婚し、一時、門司で生活を始めるが、10月には長府の家に帰る。二人の間に一男二女を得る。
6月、戦時下の雑誌刊行物整備統合政策で廃刊となっていた『層雲』が復刊し、黎々火も早速三句を同誌に発表する。
『層雲』一月号に自画像としての河童に託した連作を発表して反響を呼び、以後、俳号も「黎々火」から「圭之介」に改め、俳句・詩と共に、「夢語」と題したエビグラムを発表し新境地を拓く。
5月25日、キリスト教の洗礼を受ける。洗礼名はパウロ三木。
10月11日、山頭火三十七回忌を機に、自宅前庭に山頭火の句碑二基及び井泉水と黎々火自身の句碑を建立。
随筆集『かつば無頼』を刊行。雑誌『太陽』九月号に「流離漂泊の人たち」と銘打つての蕪村・一茶・放哉・山頭火の特集が生まれ、近木撮影の山頭火後姿の写真に「うしろ姿のしぐれてゆくか」の句を添えて大きく発表されたことから、この写真が一躍有名となる。
5月21日、詩集『近木圭之介詩抄』を刊行。
3月21日、『ケイスケ句抄』を刊行。
1月23日、長府藩侍屋敷前庭に山頭火詩碑を建立。また5月22日、下関市長府惣社町パン屋「千代」の店先に山頭火の句「ひらひら蝶はうたへない」と圭之介自身の句「言葉ノナイ日日没トばんがアレバ」の二基をステンレス製の鎖でつなぎ、鎖を自由に変化させて造型を楽しめる碑を製作設置する。のち近木邸の庭に移される。
12月20日、層雲自由律叢書の一冊として『近木圭之介詩画集』を刊行。
3月9日、逝く。
9月、圭之介の長女知津子の夫で俳人である川島条の編纂で『日没とパンがあれば―近木圭之介の伝言』が刊行される。圭之介の作品から厳選した俳句約七十点、挿絵等のイラスト約百五十点を収録。3月9日を「黎々忌」と定める。

海峡の向うで菜の花が咲いている
砂丘に階段があるごとく月夜のぼり行く
しんしん雪荷造りされた私の骨が
樹々ふと息を戦さはいやだ
不在の午後に会心の椅子を配した
動かぬがいいまだ指に暗さが
たれが恋した海峡の貝殻の音
言葉のない日日没とパンがあれば
突然江戸の写楽がこの坂をのぼってきた
旅の一人に町の川いそぎ流れる
砂丘へたれが菜の花をすてたのか
散ったあとも心に葉はちってくる
海峡に雲がたまり雲に海が鳴る
手は重いから地へ垂らす夕日のように
古里眠い石も
幕末の志士が斬れをためす藩邸の赤い実

（川島条編『日没とパンがあれば』より）